

関西 YWP 第 22 回例会

「日本の都市社会基盤の変遷及び若者へのメッセージ」

日時	2022年2月22日(土) 14:30-17:00
場所	京都市職員会館かもがわ
参加	勉強会 18人

1. プログラム

14:00~16:30	木下博夫さんによる講演・質疑応答 「日本の都市社会基盤の変遷及び若者へのメッセージ」
16:30~16:40	休憩
16:40~17:10	グループディスカッション 「関西YWPとしての活動方針アイデア出し」
~17:15	閉会

2. 内容

冒頭、代表の船岡(京都市上下水道局)から、1月25日に開催されたYWP総会において、Water LoopがYWPの関西支部として認められたと報告があった。

木下氏の講演内容は次ページ以降に示すが、「感性を磨き、理念を持って、技術開発や社会実装を行って欲しい」という内容であった。講演後の質疑応答は活発で、5人から質疑があった。

休憩の後、関西YWPの代表交代が行われ、2020~2021年度は横井(京都市上下水道局)が代表を務めることとなった。そして、神田(水ing)のファシリテーターのもと、「関西YWPとしてどのような活動をしていくべきか」というお題で、グループディスカッションを行った。「海外の水事情を学びたい」「他業種(ガス・電気・情報)の話を知りたい」「防災、計画、設計など、テーマを決めたケーススタディをしたい」「水環境学会だけでなく、日水協の全国開発や日下協の全国開発の機会を活用しては」などの意見が上がった。



令和2年2月22日

木下 博夫

次世代の日本を背負う人達に！ ～科学、技術、哲学の連携を考える～

1. はじめに

科学、技術、そして哲学というものが今日の講演のテーマです。ここでいう科学とは、研究開発のことであり、技術とは、社会貢献に使っていく段階のことを指します。そして哲学とは、理念のことです。何のために研究をし、何のために社会に実装していくか。そこに理念が必要となります。そのためには、これからの社会の在り方ということについて、深く考えていく必要があります。

2. 自己紹介

私は1943年（昭和18年）生まれで、つい先日喜寿（77歳）を迎えました。終戦時は疎開先におり、戦争のことはほとんど記憶にありません。

父が公務員で転勤が多く、小学校3つ、中学校2つ、高校2つを転々としました。大学だけは4年間、京都大学で過ごすことができ、農林経済を学んでいました。専攻は仕事には直結しませんが、私の人格形成のどこかに影響があったのかも思っています。

大学卒業後、建設省に入庁しました。高度経済成長期であり、1年の間に何度も給料のベースアップがあった年もありました。建設省では、河川局や都市局など、ほとんどの局を経験しました。その中で下水道の仕事を担当したこともありました。

大平内閣（1978年～1980年）の時には、大臣秘書官を務め、大臣の答弁書をチェックしたりしました。最近では、原稿を棒読みする大臣も居ますが、私は、大臣にいかにか人柄を出してもらいながら答弁していただくかに注力しました。大平内閣は最後、不信任を突き付けられ、衆参ダブル選挙を行いました。そこに政治の世界の凄まじさを垣間見ました。

1984年～1987年は京都市に出向し、計画局長

と副市長を務めました。まわりは皆ベテランの中で、40歳そこそこで任に就き恐縮しました。京都市では古都税を担当し、苦勞したのを覚えています。

1989年～1990年には日米構造協定があり、アメリカが日本に色々注文をつけてきました。公共事業の拡大がテーマでしたが、投資をアメリカに有利に使わせてくれと言われる中で、飛行場の建設等についてよく議論しました。

最後に携わったのが中央省庁再編でした。どういう組織形態にしても、上手くいかない部分は出てくると思います。それより、外交・教育・防衛等、国がやるべき業務は何なのかという視点が必要だったかもしれません。国土交通省について言えば、建設省、運輸省、北海道開発庁、国土庁が合体しました。この中には、気象庁も海上保安庁も鉄道、道路、河川等の部局も含まれます。危機管理の面から言うと、大きなアクシデントがあった場合、1人の大臣でこれら全てを賄うのは厳しいのではないかと思います。

退職後、第3回世界水フォーラムを担当しました。水というのは、先進国では水資源開発とか災害関係とかがメインの話になりますが、貧困国では、水汲みなどが女性の仕事とされ過酷であったり、衛生的な問題も多かったりで、水という問題1つとっても、幅広いと感じました。

役人生活が終わった後は、道路関係四公団の民営化の話があり、阪神高速の社長として民営化の取組を行いました。職員が知らず知らずのうちに役人ぼくなっていた中、お客様という言葉遣いであったり、サービスエリアのトイレの刷新であったり、職員の意識改革をできたという意味では、効果があったと思います。

その後は、京都国際会館で館長を務め、今はワールドマスターズゲームズ関西で事務総長を務めています。

3. 公共インフラ整備の変遷

近現代の日本におけるインフラの転換期は4つありました。1つ目は明治維新、2つ目は関東大震災（1923年）、3つめは第2次世界大戦、4つ目は阪神淡路大震災及び東日本大震災です。これらの大きな節目を経験しつつ、明治維新から国造り150年が過ぎました。

明治維新後は富国強兵として海運が必要であったため港の整備が行われたほか、災害対策のための治水工事が行われました。また、鉄道整備も短期間で行われ、明治の末には2万kmの鉄道ネットワークが広がっていました。その他にも、生産力の拡大を目指して、圃場整備等の区画整理事業が行われました。明治維新の時代の先人の方々の努力は大きかったと思います。

ただ、廃藩置県については、地政学的にももう少し良い分け方があったのではないかと思います。音楽や服装にしても、追い付け追い越せで欧米化しすぎてしまったきらいもあります。古来より信仰してきた八百万の神があった中、神仏分離と廃仏毀釈をしたのは強引すぎたのではないかと思います。

関東大震災の話は省略しまして、第2次世界大戦後の話に移ります。戦後すぐの頃は、水害で毎年千人以上の被害者が出ていたので、災害対策に力を入れました。次いで、道路が道路と言えない状態だったので、道路特定財源を取り入れながら、急速に道路整備を行っていきました。昭和30年代後半になると、住宅の改善が叫ばれるようになり、ニュータウンの建造が行われました。以降も、それぞれの時代に沿ったニーズの中、整備が行われていきました。

急成長を続けてきた我が国ですが、今後、成熟化の先にある課題に取り組んでいく必要があります。例えば、阪神淡路大震災以降、電線の地中化や共同溝構想等、施設面での災害防止・減災・強靱化が求められています。

一方、安全だけでなく、住んでいる人が豊かさを感じるために、環境面や景観面等、都市の美しさにも配慮が必要な時代になってきています。また、メンテナンスフリーや循環型資源も求められていますし、ガスのパイプと水道のパイプの共同整備といった、複合系整備の話も必要になってくるでしょう。

4. 現代風潮とインフラ整備のミスマッチ

これまで量的拡大をしてきた日本ですが、過剰整備を是正していかなければならない局面に入ってきています。最近の異常気象等を考えると、今後も想定外と言われるような大災害はあると思います。しかしその中で、河川や水道・下水道にしても、管理形式も含め、本当にどこまでの整備をするべきなのか、考えていかなければいけません。

昔は政治にもっと緊張感があり、その中で国の省庁の役人は仕事に携わっていました。現在の政治の問題の原因はどこにあるのでしょうか？その原因の1つにテレビ文化の低俗化というものがあるように感じています。

AI技術の進展により、囲碁や将棋では機械が人間に勝つようになりました。疲れを知らない機械が強いのは当たり前ですが、このような単純理論、ゲーム感覚が行き過ぎてしまうと大丈夫かと感じてしまいます。もっと、人間の感性を重視して、人間には機械と違ったものがあるという気持ちで接して欲しいと思います。

iPS細胞を活用した再生医療は、不治の病を救うという点では非常に良いのですが、医療は果たしてどこまで人間の体を治してよいのでしょうか。哲学というか倫理を考えていかなければいけません。研究開発の目標というものにも関連しますが、こういった哲学を、是非皆さん1人ひとりが考えて欲しいと思います。

5. 感性の大切さ

神経質すぎる話かもしれませんが、例えば、音というものに対しても、よりセンシティブであって良いかなと思います。このような感性というものについて、その大切さを皆さんで考えて欲しいと思っています。

オリンピック・パラリンピックは見るスポーツですが、私が今携わっているワールドマスターズゲームズは参加するスポーツです。しかも障害を持った方と一緒にプレイします。障害者のスポーツ参加を通じて、社会のバリアフリー化がより一層進むのではないかと思います。そういう事を通じて、いろんな方に意欲を出して欲しいと思っています。

では、意欲の根源は何なのか？ 若い方々からは、先行きが見えない不安というのを聞きます。車を買わず、家はシェアハウスで良く、飲みにも行かない。では、皆さん方の意欲の根源はどこにあるのか？ どういう所になら意欲を見出せるのか？ 考えていただきたいと思います。

今日は女性の参加者が多いようです。水業界には女性の方が多いのでしょうか？ 今後、より一層活躍して欲しいと思います。しかしながら、男性と伍して働くだけでなく、弱い立場の男性も居ると思いますので。相互信頼の関係でやることが、新しい社会の在り方かなと思います。

また、今日は大学の方も来ていると聞いています。アカデミアの方々の全員がそうではないですが、比較的世間が狭い方が多い傾向にありますので、アカデミアの独善とならないよう、このような会を活用し、いろんな人と接して欲しいと思います。

感性の話に戻りますが、例えば、160億年の長い宇宙の歴史の中で、狂いのない地球の自転であったり、この人類社会の成り立ちであったり、よくできているんだなあと、ふとした瞬間に感慨に耽ることがあります。

人類が誕生してから数万年経ちます。物質的には幸せになってはいますが、人間の感性というのは、そう変わっていないのではないのでしょうか。私のオススメは、南フランスにあるマティスの美術館ですが、遥か昔のアルタミラの洞窟の絵にしてもピカソの絵にしても、受ける印象は様々でしょうが、自分の好きな絵はこのようなものだ！ というのを大切にしてみたいかがでしょう。

6. 哲学（理念と目的）を持つ

日本全体が高度成長する過程で、一極集中する利点はあったと思います。しかし、一極集中する中で、首都圏には過剰なまでのうぬぼれが、地方には首都圏への依存が生じてしまったのかなと思います。関西においても、どんどん意思決定をしていくべきだと常々言っています。

都市を議論する際、視点として、「6つのS」（スケール、スパン、スピード、ストック、スピリッツ、センシビリティ）と「1つのS」（スローガン）を持って欲しいと思います。肝心なのは、スローガンです。どういう課題をリーダーが持ち、組織や企業を率いていくかが重要になります。

これから、皆さんは様々な水問題に取り組んでいかれると思いますが、課題に対し、どういう形でアプローチしていくか問われます。京都は、世界文化自由都市宣言で、「輝く都市は住む人達が創るものである」と謳っています。こういう視点を持ちながら、まちの在り方について、議論していただければと思います。

以上が、高度経済成長期に働き、今人生の最終局面に来ている私が、現代の風潮に若干の問題を抱きながら、皆さんに伝えられるメッセージです。